勉強の裏ワザ教えます!!

“その道の達人”8人の先生登場

前期の日程も半ばを過ぎ、学生諸君もそれぞれ生活のリズムをつかんだことだろう。さまざまな側面をもつ大学生活。その取り組み方は人それぞれだが、勉強への取り組み方は、誰もが思い浮かべるのは、授業やゼミナールに出席してノートをとったり、図書館で学習することだろう。こうした正攻法が重要なことはいうまでもないが、わき道にそれることによって、思いがけず理解が深まることもあろう。

そこで本号では、各学部および外国語教育研究機構から八人の先生方にご登場を願い、通常の方法とは一味違う勉強の裏ワザを披露していただいた。“勉強の達人”の教えを活かし、これからの学習を有意義なものにしてもらいたい。

映画鑑賞も勉強の一種

松本　祥尚

大学での講義に何の興味も持てず、ただ単に写経の如く板書を書き写すために出席するというのでは、四年間で二百万円以上支払われる学費が無駄になってしまう。

そこで、大学での講義に興味を持つための方法の一つとして映画鑑賞を採り挙げよう。

資本主義経済を支える株式会社は一体誰のものか、という問題がある。この答えの代表的なものは、企業はそこで働く従業員のためにある」というものと、「企業は株主のためにある」というものの二つがある。ここでは敢えて解答を与えないが、アメリカにはこのようなビジネス・ストーリーを映画として扱ったものが多い。

その一つが八〇年代に公開された『マイケル・ダグラス主演の『ウォール街』」という映画である。この映画では、ダグラス演じる主人公が、様々な手段を用いて企業の株を買い占め、乗っ取ったり、設備といった財産を高い値段で切り売りしたり、株を高値で買い戻させたりして、自分が投資した総金額以上の儲けを得る。

ここでのポイントは、いかに安い値段で企業を買収し、いかに高い値段で売るか、ということである。その場合、安い値段で買収できる企業というのは、その現経営者が効率的に企業資源（ヒト・モノ・カネ）を使えておらず、その結果、業績が低迷し、株価が低いという場合である。

このストーリー中、企業のマル秘内部（インサイダー）情報の入手や、株主総会でのプレゼン対決では、大学の講義に出て来る専門用語が、現実の世界の出来事として描き出される。

他にも公開当時、現代のシンデレラ・ストーリー”と称され、今の超人気女優であるジュリア・ロバーツに与えた『プリティ・ウーマン』という映画も、そのプロットの中心には企業のM&A話がある。

試しに一度鑑賞してみて自分で確認してもらいたい。映画の感想は（osmasu@kansai-u.ac.jp）まで。

（商学部助教授）

特集勉強法のすすめ

辻　大介

勉強とは何も講義やゼミに限ったものではありません。視野を広げ、ものの見方のレパートリーを増やすことができるのが、勉強と言えるでしょう。その意味でのシンデレラ・ストーリーは、誰でもいくらでもあります。

特集のテーマは何でもまいません。子ども向けのSFマンガを八十冊読むとか、七〇年代のハリウッド映画を二十本観るとか、ういう目標を毎月決めます。このとき、テーマはできるだけ絞り込み、かつ、そのテーマに関するものは自分の好き嫌いに関わらず、満遍なく網羅する。そのうえで、「なぜ」と、そして、数をこなすことが大切です。すると、そのうちに、「世界」がおぼろげに見えてきます。

例えば、古典落語を年中聞いていれば、江戸時代の五十本も聞けば、江戸庶民の世界が知識としてはなく肌で感られてくるはずです。新聞の一面だけでも各紙で二十日間分読み比べていけば、メディアごとに違っていることを体で感じることができます。

おびただしい言葉の洪水、あなたは一つの新しい世界観を身につけているのです。

別に、お金のかかる各特テーマを組む必要もありません。大学のキャンパスを渡り歩いてマンホールの写真を撮り集めてまわるとか、阪急百貨店と阪神百貨店に入った人のあとをこっそり尾行して行動パターンを観察する、なんてことでもいいのです。そんなのあほらしい、と思う人もいるでしょうが、実はこういうことを研究する「考現学」という学問もあるくらいなのです。詳しくは今和次郎著『考現学入門』へちくま文庫〉を読んでみてください。

いずれにせよ、この手の「勉強」は時間的・精神的な余裕がないと難しいものです。会社に入って仕事に追われるようになったりすると、なかなかできません。その点でも、大学生活こそ、のうちにみなさんにオススメしておきたい勉強方法です。

（社会学部専任講師）

現場を見ること

吹田　浩

この神殿の壁画には、王や神々奇妙な道具をもって何やらを怪しげな儀式をする姿が数多く描かれています。また、たくさんの象形文字も書かれている。

で、私は初めてやってきたとき、文字が読めず、儀式の内容が今ひとつわからなかった。あ、なんて悔しい、中国の漢字をみるような感じと言えば、わかってもらえるだろうか。文字は何となくわかるのだが、全体的な意味がどうもよくわからないのである。日本でエジプト史を勉強し、エジプトの現場に来ると、そこは思わぬ、そのようなトピックについて答えられないことも意外には思われない。

これに対して日本人で、ある若だちが自分たちの考え方や、文化、習慣、を英語で発信する必要はこれからますます高まり、日本人の各種衛星放送・ケーブルTV等の場合と違って大いに恥ずかしい思いをすることになる。

バイリンガル教材を利用する際には、まず英語を読み、見て語で意味を確認し、今度は日本語を見ながら英語を再生するのを目標にするのが良い。あくまでも目標は、英語の表現を盗んで自分のものにすることだ、という視点を忘れないように。

興味のある分野のバイリンガル本を数冊本当にやってみる。どこの大学でどんな学部にでも、そういう相性がぴったりの先生が必ずいる。そういう先生を探しだして、個人的に仲良くなるのが、ひと上がってくる若だち自身の素朴で具体的な疑問から出発するより他ないだろう。そういう疑問が自分の納得ゆく形で解決された時、はじめて「勉強」になる。

（外国語教育研究機構助教授）

日本を題材とするバイリンガル学習

靜　哲人

外国語の力をもっとも効率的に伸ばす鍵は、理解可能なインプットの量を増やすことであり、その為には日標語と母語が対照して提示されているようなバイリンガル教材を利用するのが最短コースである。英語で言うと、英米の文学作品の対訳本などは昔から多くが、最近の特徴は、例えば講談社のバイリンガルブックスシリーズや、雑誌の「ぴらがなタイムズ」などのように、日本文化や事物を扱ったもの幅広く見つかる、ということだ。

これらを利用するのを二重の意味でおすすめする。第一に、内容自体はよく分かっていることなので、英語で発信する際の鍵力がつく、ということである。

日本の英語教育の題材は伝統的に日本の事象を扱ったものにすべし、との張が最近盲目を集めていたが、大賛成である。だいたい君たちが英米の文化や事物について英語で語ったり書いたりすることを求められることなどまずないのである。だれも日本人にシェイクスピアについて教えてもらおうとは思わないし、そのようなトピックについて答えられないことも意外にはわからない。

これに対して日本人で、ある若だちが自分たちの考え方や、文化、習慣、を英語で発信する必要はこれからますます高まり、日本人各種衛星放送・ケーブルTV等の場合と違って大いに恥ずかしい思いをすることになる。

バイリンガル教材を利用する際には、まず英語を読み、見て語で意味を確認し、今度は日本語を見ながら英語を再生するのを目標にするのが良い。あくまでも目標は、英語の表現を盗んで自分のものにすることだ、という視点を忘れないように。

興味のある分野のバイリンガル本を数冊本当にやってみる。どこの大学でどんな学部にでも、そういう相性がぴったりの先生が必ずいる。そういう先生を探しだして、個人的に仲良くなるのが、ひと上がってくる若だち自身の素朴で具体的な疑問から出発するより他ないだろう。そういう疑問が自分の納得ゆく形で解決された時、はじめて「勉強」になる。

（外国語教育研究機構助教授）

法学・政治学では裏ワザはメビウスの輪の如く

君塚　正臣

「裏ワザ」について語る前に、果たして何が法学部の「表ワザ」なのだろうか。例えば民法でいえばそれは、民法の全講義に出席しなければ理解を深めることが夢にでてくるほど徹底的に読みこなし、熱心な人はゼミに参加・発表することを指しているのだろう。

だが、それで官易に民法が「わかる」のだろうか？法学部に生息する人ならば、法学や政治学の各分野が連関していることくらいもう知っていよう。そこで、関連科目の勉強はある種の裏ワザと言えなくもない。民事訴訟法や商法、ロー・マ法などを勉強すると民法の理解も進むと言える。

そこで法律学全汎に勉強しさえすれば法律学はわかるのだろうか。法律がらみの問題に答えられるだろうか？法律家が世間知らずではいけないと言われるのは、法律学が大きく言えば社会科学の一分野であって、人間社会の事象全てと切り離せないことに理由がある。電球、つも替えられない裁判官に原発の差止訴訟で判決が書けるかを考えればわかりやすい。「法律」を「政治」へ置き換えても事態は一変しない。

法学部学があらゆる学問を極める必要はない、無理でもあるが、他の専門家の指摘を受け止める程度の広い教養は必要だ。それは人間として尊敬を得るために必要だということ以上に、法学士の資質に関わるものである。

これは別に教養の講義に出席することだけではなく、単純に幅広く本（文学に読むこだわる必要なし）を濫読してもよい。全教養は法学政治学の営々たる「裏ワザ」と言えよう。

それだけではない、映画鑑賞、スポーツ、パソコン通信、通学中など生活の諸場面で、ホンのちょっと法学政治学的に考えてみることだって正しい「裏ワザ」だ。が、それを楽しくやるにはパリパリの表ワザが必要だったりする。そう思うと法学政治学でのこの「裏ワザ」は本当に裏なのかよくわからなくなってくる。

法学部はまるでメビウスの輪になっているらしいですよ。

（法学部助教授）

探せ！

中澤　信彦

裏の裏は表、すなわち、裏ワザも極めてゆけば、限りなく正攻法に近づいてゆく。

大学における勉強の正攻法は、「本を読むこと」「授業に出ること」だろう。しかし、「本を読むこと」「授業に出ること」自体は目的ではない。興味のあるかないか、野の本を無理に渡ってみたところで、「やっぱり面白くないなぁ！」と確認するだけだし、いくら眠い目をこすって一限目から授業に出ても、自分にとって興味ある内容が講義されていなければ、無駄魔に呑至、したがって、勉強を真に効率的に進めようとすれば、日常生活から浮かび上がってくる若だち自身の素朴で具体的な疑問から出発するより他ないだろう。そういう疑問が自分の納得ゆく形で解決された時、はじめて「勉強」になる。

面白い！と実感できる。経済学のような、日常生活に密着した専門分野であれば、なおさらである。

そこで本題の裏ワザ！そうした若だちの素朴な疑問を（たとえそれが幼稚な疑問でも）呆れることなくきちんと答えてくれる、君だちと問題関心を共有できる、そういう先生を探してみよう。どこの大学でどんな学部にでも、そういう相性がぴったりの先生が必ずいる。そういう先生を探しだして、個人的に仲良くなるのが、ひと上がってくる若だち自身の素朴で具体的な疑問から出発するより他ないだろう。そういう疑問が自分の納得ゆく形で解決された時、はじめて「勉強」になる。

これは経済の実体験です。大学入学以来四年女生の春までずっと経済学を学ぶことに絶望していた私が、今では教壇に立って経済学を教えています。それは（後に師匠となる）ある教授との出会いがきっかけでした。

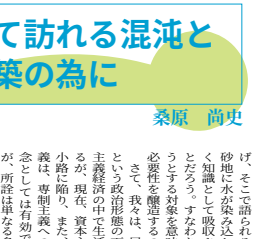
疑問を（たとえそれが幼稚な疑問でも）呆れることなくきちんと答えてくれる、人とした学生時代を送ってきた故に、披瀝に値する有効な方法論と持ち合わせていないが、あえて一点提案すれば、ひとつは、自分に合った本を読むという教えています。読みにくいと感じたら、同じ主題について書かれた別の本を読んでみよう。そして、再び最初の本を読んでみれば、知識が増えている為に、意外

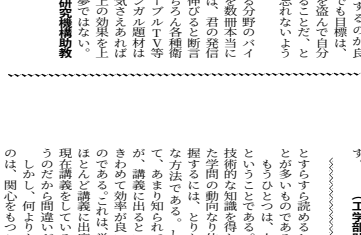
（経済学部専任講師）

やがて訪れる混沌と再構築の為に

桑原　尚史

音楽を友とし、怠惰を恋人とした学生時代を送って有効な方法論と持ち合わせていないが、あえて一点提案すれば、ひとつは、自分に合った本を読むという教えです。読みにくいと感じたら、同じ主題について書かれた別の本を読んでみよう。そして、再び最初の本を読んでみれば、知識が増えている為に、意外





いい。工学に関する基礎学問の習得が大切であることは言うまでもないが、ボトムアップ的な学習内容が多いため何かが見えず、自らの学習意欲さえもなかなか生まれてこないかった。

私は、ある教授の講義で世界の発明家について興味深い話を聞く機会を得た。彼らは自らの疑問や興味の解明の為に、新しい発想に基づいて積極的に研究を実行し、偉大な発明に至ったというありふれた話がされた。その中で、私は発明家の成功よりも、大失敗や苦労を知ることに非常に興味をもった。多くの場合、彼らの奇抜な発想（着想）や直感、あるいは偶然性がその研究成果に大きく関与していることに驚かされた。私は単純に、教授の紹介する科学技術史や技術書を知ることはおもしろいことだと感じたはずである。教授はフランスの細菌学者パスツーレの有名なエピソードを聞いたことがあるかもしれない。それは、パスツーレが思い若かばず、強い向学心には至らなかったが、単位取得が最大の学習推進力であったかもしれない。

向学への推進力

山本　秀樹

学生時代の大きな不安は、大学で受ける講義や基礎実験は実社会で役立つのか？私は研究者や技術者に本当になれるか？ということでした。難しいテキストとでもいえる、講義に出席しても、工学に対する将来の夢やあこがれの様な具体的なイメージがどうしても思い浮かばず、強い向学心には至らなかった。

や展望講演に進んで参加し、研究や技術開発の裏側のエピソードを聞くことにたいへん興味をもっていました。専門外の研究会や講演会に参加し、情報収集を行うことも、自分の研究意欲の活性化につながり、私自身の研究に大きな影響を与えていると思っています。私は自分の中に眠る好奇心や興味を引き出し、研究の推進力となる新たな機会を捜し求めています。

（工学部助教授）

とすらすら読めるということが多いものである。

もうひとつは、人に聞くということである。これは、技術的な知識を得たり、また学問の動向なり体系を把握するには、とりわけ有効な方法である。したがって、あまり知られていないが、講義に出ることもいうのはもっとも効果的なものである。これは、学生時代ほとんど講義に出席せずに現在講義をしている私が言うのだから間違いがない。

しかし、何より有効なのは、関心をもつことだ。関心と動機さえあれば、退屈であった講義は魅力をもたげ、そこで語られる言葉は砂地に水が染み込むがごとく知識として吸収されることだろう。すなわち、学ぼうとする姿勢を意味づけ、必要性を醸出する為だ。

さて、我々は、民主主義という政治形態の下、資本主義経済の中で生活しているが、現在、資本主義は袋小路に陥り、また、民主主義は、事制主義への対立概念として有効であったが、所詮単なる多数者の意志の反映、結局のところポピュリズムへと陥るのがおおよその帰趨。そして、今、肥大化した国家は、個々の希望に応えきれなくなり、求心性を失っている。

これらの社会システムは、おそらく、皮膚感覚で現在の学生諸君が供達が成長し大会に出て行く頃には終焉を迎え、同時に新構築が始まることだろう。模索が始まることだろう。現在は混沌を呼ぶ。混沌の中に必要のは知識である。学生諸君よ、やがて訪れる混沌と再構築の為に、共に学ぼうではないか。

（総合情報学部教授）